

背の高い白樺の林の奥から、朝の低い太陽の陽射しが差し込む中。

発砲音にも似た音が、アルテミエフ家付近に響いている。

ホームステイの間、ほぼ毎朝稽古を重ねてきた新とアリーシャ。そして朝のジョギングがてら稽古番をしてきた北大路さくら。3人それぞれ、以前よりも成長を遂げていた。

アリーシャの突きはさらに早く重く、かつシステムの持ち味である二の手三の手への切り替えをする余裕も。

しかし新のカウンター打撃と体外介達の技は常にキャパシティで上を行き、かつ切り替えが出る都度、習っただけだった技の実戦での引き出しが開かれて、その咀嚼から無意識下の連携が導き出される。

そして北大路の眼は今やしっかりと2人の動きを捉えている。アクシデントで体を崩した2人の間に安全に割って入ったことも。

「若いっていいよねえ、吸収超早いもんねえ」

「吾華音だって一門なんだし、一緒に稽古すればいいのに」

「それがなんとびっくり。日々のお仕事の方が武術より強いのだった」

「これからアイドルデビューする子の言葉じゃないわ、それ」

稽古を見守りながら朝の緑茶を愉しむ吾華音とアンジェリカ。朝と夜それぞれの予定に多少疲れの色を見せる。アンジェリカの言葉に、苦笑いで答える吾華音。

「あいにく遅咲きも遅咲きでございまして…えっ？」

グラスの氷が音を立てる。「それ嫌味？」と言いかけたアンジェリカの言葉を遮って吾華音が2人を指差す。

「見てて。多分面白い事が起きる」

すかさず双眼鏡を覗き込むアンジェリカ。

数発に1度だが、地面が爆ぜる場所がいつもの新の後方から、2人のちょうど間に変わっている。瞬間、何かを呟いたアリーシャが、その爆ぜた地面を踏みつける形でさらに前に踏み込んだ。

「やるなあアーヤ、やっとなら捕まえた。さてどうする？」

「ちょっと！止めなくて平気なの？」

その言葉の間にさらに間合いを詰めたアリーシャ。一刹那置いて、新の長い髪が背中側に大きく広がる。アリーシャの左掌が新の肩に当たろうとし、ほぼ同時に右腕も腹の位置に入ろうとした時。

獣の甲高い咆哮を想起させる音が響き、アリーシャの身体が宙に舞った。両腕は完全に開いている。そして、跳ね上がるアリーシャの身体を追うように新の腕が伸びていた。その掌は首に添えられ、親指が軽く押し込まれている。慌てて北大路が声を上げ止めに入る。素人目にも危険とわかる状況にアンジェリカも声を上げた。

「ああああれまずいよ吾華音！2人とも怪我したんじゃないの！？」

「大丈夫。アーヤの首に切り傷ついたかもだけど、内部挫傷とかはないよ。よく押し込めた、新…もう私じゃ敵わないな」

北大路の言葉でアリーシャの首から手を離れた新、その手を背に回して落ちるアリーシャを抱き留めた。

しばらく2人とも動かない。互いの心音が聞こえるほど、身体は大きな拍動を起こしていた。肩で息をしている。

やがて、見開いていた瞳を閉じて深呼吸すると、汗の浮かぶ笑顔で新がアリーシャに言った。

「とうとう捕まっちゃった。アリサちゃんほんとすごい」

「何言ってるのさ。仕組みがやっとならわかったと思ったらまた何か出てきたよ、よくわかんないのが。でも、ようやく掴んだ…これがカイツツ(介達)…」

「おふたりとも、無事なのですか？何かあっては、わたくし…」

北大路の反応に2人が驚く。まさか泣かせてしまうとは。慌てて無事をアピールする。

「だ、大丈夫です！ほら！ちゃんと身体動くし、どこも痛くないです！」

「そうそう！ほらほら！」

何故か2人揃ってぽわぷり体操の同じ部分をやってみせる。

「よかった…。わたくし、本当にどうしようかと…あっ、アリーシャ様…首に…」

「あ…ごめんね…多分腕を返す時に爪ひっかけちゃった…」

首に触ってみたアリーシャ、わずかに出血している事に気付く。

「大丈夫だよ、このくらいの擦り傷、普段もよくある」

「いけません、このさくらが見届けた稽古、わたくしにも責任が…」

そう言うと、北大路はアリーシャの首に優しくキズパワーパッドを貼った。

「技を極める身、無茶をするなどは申しません。ただもう少し、ご自愛くださいまし…」

「あっ、えっと、その…ゴメンナサイ」

軽く流すつもりだったアリーシャだったが、近くで見た北大路の涙ぐむ瞳の下の頬が少し朱に染まっている事に気付き、慌ててしまう。

(流石元スターライトクイーンだ…かわいいなあ)

知らず知らず自分も赤面していたところに、吾華音の声がかかった。

「おっと、登場が早かったかなー？…アーヤ、それできれば国に持ち帰らないでくれるかな。頑張ったのは認めるけど、これを体系化するのは幾ら何でもまずい」

「それは心配ないよ。アタシがこれを覚えたかったの、ライブの時の演出のためだもん。それにこれフツのヒト、見ても絶対わかんない。アラタ、ちょっといい？」

先程の交錯がなかったことであるかのように、普段の調子でアリーシャが新に耳打ちする。

「えっ？ええっ！？そんなこと出来るの！？」

「出来るよ！ちゃんど計算もしてた。身体と感覚が追いついたのが今日だったけどねー。お、ぐうぜーん。この木丁度いいじゃん。試しにやってみよう、失敗してもアカネのケアあればなんとかなる」

「こらこら」

迷惑そうに言う吾華音をよそに、アリーシャは近くの木の前でしゃがみ、木の側の腕を上にも上げた。新がその近くに立つ。

「ここがああ階段の真ん中あたりで、真上に『例の』とっかかりあるとするじゃん？あ、その前に…サクラ」

「なんででしょう？」

「さっきはありがとう、今から見せる新技をキミに捧げるよ」

「えっ…」

「じゃあアラタいこうか、せーの！はい！」

北大路のリアクションを待たずアリーシャが言った瞬間、新の掌がアリーシャの上になっている側の掌を言われた通りの強さで叩く。

「たーっち！ってええー！」

次の瞬間、アリーシャの身体が高々と舞い上がった。5メートルは飛んだだろうか、慣れた様子で木の幹に左の手足をかけている。

「っとまあこんなこんな感じ。アカネ、これがアタシのカイタツ、の答えだけど、正解？」

「…まいったなあ、大正解」

「へへーん♪おそれいったか！…サクラ、つまらなかった？」

「そんな…素晴らしいです！あまりのことに、惚けておりました…！」

「喜んでもらえたらよかった、これがアタシの本業だからネ」

少々うっとりか混ざる笑顔で樹上を見上げる北大路。その表情に(くあー。これがウワサの惚れてまうやんてヤツかー)と思いつつ、途中の枝が少なく滑らかな白樺の木の表面を、手袋をした左手とスニーカーの外縁を滑らせてくるくると回転しながら降りてくるアリーシャ。一方、新はまだ啞然とした顔。

「アラタもやってみる？気持ち良かったヨ」

「楽しそうだけど…説明は座学で何時間くらいかなあ…」

「アラタは多分アタシが言った通りやればすぐできちゃうよ」

「無理無理無理！私、さっきも自分が何してたのかよく覚えてないもん！」

「じゃあお姉ちゃんがアーヤに教わっちゃおうかなー♪」

「ヤダよ、アカネは自分でできるでしょ」

「おっと、ばれてーら」

「え！？ホントにできるの！？」

「新のさっきのはあたしにもできないけどね…というか、あれはあたしには『備わってない』。じいちゃんの鍵が健在なの信じてたけど、外れてたらヤバかったぞ？」

「え…鍵って何？」

首を傾げる新に、急にアリーシャの背筋が凍る。

さっきの擦り傷の奥にあるのは左の頸動脈だ。新が無意識に動作を完遂していたら…そしてあの音。以前吾華音から受けた技と違い、気道から発せられていなかった。介達に理解が及んだ後でも、どうやってあの時新が自分の腕を弾き、身体を浮かせたのかわからない。新の深淵はまだ先にあるのだと思い知る。

本人が理解していないということが、相対する側には一番の恐怖なのだ。

「稽古の時調子に乗って攻めすぎないように注意するヨ…そうそうアラタ、さっきの感じで組み込みたい動きを実は考えてあったんだ。今晚打ち合わせの時説明するね」

「よかった、毎日稽古してた成果がああいう形でステージで出せるなら、私も嬉しい。さっきみたくわかりやすく教えてね」

「あの…このところお2人が話されてる『ステージ』って…」

北大路の問いには吾華音が答えた。

「ぽわプリのみんなとか他の一部の子、来週の日曜学園長から内容未定のオファー入ってない？今日、その日の招待状、届く筈だから」

「もしかして、噂に聞く召苗先生のデビューステージですか？ご招待頂けるなんて光栄です…！」

「あれ。話が漏れてるなあ…。まあ、色々準備してたから流石に気づかれてるか。3人には稽古の件でお世話になっているからね。恩返しになるようなステージ、頑張るよ」

「はい！勉強させていただきます！それにしても、わたくし日々思うのですが、こうして一見アイカツに関係がないことを鍛錬することも、ゆくゆくアイカツに繋がるのを経験するに、アイドルとは何かという問いは、とても深いもの、だと…」

流石に芸能の家系の出、と4人は心中同じ思いを。

「『アイドルは人を笑顔にするもので、楽しい事知らなきゃ誰も笑顔に

できない』…いちごちゃんが渡米中に知り合った子にそんな事を言っていた。人は誰でも楽しみの先の笑顔を求めていると私も思う。案外、私の今回の事ってただのタイミングなのかもね」

「誰でもアイドルたり得る、って事かなあ。でも楽しみも笑顔も逆のベクトルを知らないと高みに至らないと思うけど、穿ち過ぎかな」

年長であり、今はアイドルではない吾華音とアンジェリカが言う。

「つまるところ椅子取りゲームでもあるじゃん？なりたいみんながなれるわけじゃないし」

「自分1人でどうにかなる事でもないと思います。支えてもらって、引っ張り上げてもらって。そして今の位置にいる」

「ええ。その支えを、召苗先生やいちご様や…たくさんの方々に頂きました。だからこそ、先生のステージが本当に楽しみで」

現役アイドルの3人が言う。北大路の問いかけの答えには結局辿りつけない。漠然と理解している事がまとまらないもどかしさを残しつつ。

「あ、すみません。なんだか難しい話に…」

「いやいや。たまにこうして考えるのも多分大事。さくらちゃん今日はロケだよ、私も外の用事だから、送っていくね」

「よかったら朝ご飯、うちで食べて行って？誘い損ねていたよ」

年長組の誘いに、北大路の表情がほころんだ。

「嬉しいです、このさくら、本物のヨーロッパブレイクファーストに憧れておりました」

「そんな大したものじゃないけどね。よかったらいつでもおいで。新ちゃんも合宿終わってから来たいんだからね？吾華音いるんだし」

「はい、ありがとうございます」

「アン姉さん、アタシは？」

「アーヤはこっち(日本)の実家に戻って食べればいいじゃない、お姫様待遇だって聞いたけど？」

「それがやだからここがいいの！」

「だったら朝からステーキとか無茶振りするんじゃないの？」

「ぶー」

「わたくしもアリーシャ様のお気持ち、少々わかります…」

「やった！仲間がいた！」

その日のアルテミエフ家の朝食は、家柄の話からガールズトークまで、広い話題で盛り上がった。おかげで時間が押しに押し、北大路の身柄はアリーシャ特急便で陸路ロケ地に届けられることとなった。

「アーヤってヘリコプター持ってなかったっけ、ここに置いとけばいいのに」

「アン姉、日本はヘリパッドないところ降りるの手続きめんどくさいんだよ」

「アリサちゃんが運転手さんなのは疑問ないんだね…」

一方。

「ゴメンね、ちょっと飛ばし気味だけど怖くない？」

「いいえ、アリーシャ様を信じておりますから…」

特急便運転の最中、北大路の極上の微笑みを目にしてしまうアリーシャ。その日の夜「アカネ！ショーファードリブンのコツ教えて！」と問うも「そんなの決まってる、安全運転しなよ」の一言で返されて頭を抱える。

「これはもう、エアカーの会社買収して先行開発機ゲットするしか…」

何故かアリーシャの心中に、運転手魂が目覚めていた。

時間を戻して、同日昼前。吾華音はムーンライトオフィスを訪ねていた。ステージのトリの衣装をラブムーンライズのトップデザイナーである神崎美月に発注していたので、その受け取りに来たのだが。

「先輩はずるい！」

「ええ…どうして今日になって怒ってるの美月」

同席している夏樹みくるも困惑気味の表情。

「美月ってば、最初は仕事は仕事って思ってたみたいなんだけど、途中からなーんかイライラし出して」

「だって、私の一番の頼みは聞いてもらえなかったんだよ？」

「それは前からわかってるのに、なんでまたステージドレスのオーダーは受けてくれたの？」

「…先輩の寸法ならマネキンやって頂いた都合よく承知してますし。私が着ない方向性でしたから、やってみたかったのもありますし」

「で、イライラしながら作ったドレスがこちらになりまーす。じゃじゃん！」

そう言って夏樹がアンヴェールしたドレスケースの中には、美しい純白のロングドレス。神崎のデザインにしては珍しく、宝石や貴金属のモチーフが使われていない。白い布の複数使いで、直球の形状勝負だ。想像以上の完成度に息を飲む吾華音。苦笑いとともにも夏樹が続ける。

「すごいツンデレもいたもんだと思いませんか？着る人余程信用してないとこのデザイン無いと思うんですよ」

「…ありがとう美月。完璧の上の上。私が着てもいいの？」

「他の誰かに着せる気でデザインしたんじゃないですし。あとみくる！
デレてないから！」

「とか言って。吾華音さんのオフアールあった日のほんの2時間で直し一切なしでスケッチして、布取り寄せて届くやすぐ縫製だったじゃん。まるで作ったことがあるか、ずっと考えてたのをようやく吐き出したみたいだったよ」

イライラした表情のまま、神崎の顔が紅くなる。ドレスをアイカツカードにコンバートして、吾華音の前に荒っぽく突き出した。

「とにかく！やる事はやりましたから！着る以上無様は絶対許しません！」

「勿論。あ、ステージのチケット届いたかな」

「来ました来ました。でもあの『仮面の装着にご協力下さい』って？」

「最初はその会場を過去に使ったあるアイドルへのオマージュのつもりだったんだけど、招待状の送り先がとんでもなくいろんなところになったから、会場で会った人同士の話でなくステージに集中してほしい、ってアイデアなんだ。みくるちゃんも今や素面で居たら話しかけられまくるでしょ？」

「なるほどねー。確かにちょっと困ることあるなあ」

「ドレスコードは指定ないから、好きな格好してきていいよ」

「わくわくするねー！美月も怒ってないで楽しもうよ」

「それは先輩次第よ」

「うわあ、にべもない。でも、他の出演者もちゃんと観ることを私は勧めるよ。おっと、次の予定が近い。美月本当にありがとう、このドレス、輝かせてみせるから。みくるちゃんも是非来てね」

「勿論です、妹さんによろしく」

そそくさと立ち去った吾華音の背中を見ながら、夏樹が神崎に言う。

「ねえ、本当に『アレ』やるの？」

「当然！これくらいの仕返しは許されると信じるわ。賛同者もいるし」

「美月美月、悪い顔しちゃってるよ」

呆れ顔の夏樹。

「にしても、その企みに乗っちゃう悪い大人もいるんだからもう…」

壁際のファニチャーに座るエンジェリーベアに視線を投げ、夏樹は軽く溜息をついた。

今回のステージの衣装は既存服がメインだが、アンジェリカのソロパート用1着とトリの吾華音のソロ用2着は新作となった。アンジェリカのソロ用は既存の服にイメージが合うものがなく、舞台女優時代のツテで作ってもらったものが既に届いている。吾華音のドレスの2着目は先程神崎から受け取った白のドレス。

残るは1着目、ラブムーンライズの純白と対を成す黒のドレス。あるブランドの既製服の使用をオーダーしたら、わざわざ「新作を起こすので時間を」と返答をくれた。そして今日が納品予定日である。

待ち合わせの和風甘味処にて、水出しの緑茶を口にしながら、お茶受けの和菓子を切って口に運ぶ。明けがらす、吾華音の故郷の和菓子店の品であり、彼女の好物だ。

予定の時間にはまだ早かったが、吾華音の座る座敷の卓の向かいに、長髪にメイクという風貌ながら、落ち着いた和装を素晴らしく着こなした紳士が腰を下ろした。

「冷やし甘酒と白玉餡蜜を。彼女には水羊羹セットと村上茶の冷やを」

「かしこまりました」

「…で、よかったかな？久しいね吾華音」

「こんなに和装お似合いになるなんて。どきどきしちゃいました。お久

しぶりです、夢小路先生」

ロリゴシックのトップデザイナーにして、そのキャラクターも有名な夢小路魔夜。今のこの姿が世間に知れたら、ちょっとしたニュースになるだろう。洋装専門であるはずの彼の和服姿、世界観が不思議なことに全くぶれていないのだ。それほどの人長い時を経て自分の好みを覚えている。成功する人物は人をよく覚えている。彼も然りだ。

「和の世界観も面白いかなと思ってね。そういえば君が喫茶店で緑茶がなくてごねていたのを思い出してね。ここはどうかね？地方の和菓子が豊富で、僕もたまに来るんだよ」

「故郷の名物があって嬉しいです。お茶も美味しいですし」

「明けがらす。甘すぎずいい和菓子だ。少し摘んでも？」

「ええ。どうぞ」

吾華音が皿を差し出すと、綺麗な所作で竹の小刃を入れ、口に運ぶ。

「うん、うん。美味しい。君の故郷は食べ物が殊更素晴らしい」

「なかなか帰れないので、近場にこういうお店があるのは嬉しいです。今度妹を連れてこようと思います」

「新は頑張っているね。たまに僕のドレスも着てくれているようだ」

「はい。ウィンタースプライトコーデが好きみたいです。引っ込み思案なんですかね…プレミアムも着こなす筈だと思っているんですが」

「噂通りのシスコンぶりだね。何せ君の妹だ、彼女も適応の幅が広くて当然だと思う。それでも、昔の君には敵わないな」

「そうでしょうか…幼い頃に先生の服を着せて頂けたのは、今でも幸運に思っていますが、ユリカちゃんやスミレちゃんのような、着るべくして、と言える存在がいなかったからで」

オーダーした品が運ばれてくる。乾杯を促す仕草をする夢小路、吾華音も倣って小さく乾杯。少し微笑んで夢小路が口を開いた。

「そうでもないんだ。あの頃の君の背中には、正に少女の心の闇が透けていたよ。そういうところは薄まったにせよ今でもある。あの頃の僕に、どれだけ刺激を与えたと思うね？」

「確かに、お仕事を頂いていた頃はあれこれ沈みがちでした…でも、今もですか？」

「裏方仕事の時の君は楽しそうだが、阻害する要素に冷徹だ。そして、ようやく脱する決意をしたようだけれども、バックステージという言葉わば影の位置に拘り続けた。僕には君が、光を拒んでいるように見えたよ。実はオファーを出すか悩んだ時期が何度かあったし、詳細は伏せるが君にインスパイアされたコーデもある」

「言われてみると…ですね。でも私は、バックステージにも光を見出していましたし、悔しいですがもう少女という歳でもありません」

苦笑する吾華音。夢小路は胸元から長財布を取り出すと、中からアイカ
ツカードを取り出し、卓に並べた。

「そうだな、君を少女と言うのは失礼だろう。今や立派な淑女だ。…今回のオファー、楽しませてもらったよ。コンテの段階で心が踊った。眩しい世界の裏側に佇む君を象徴するものが出来たと思う」

「…！凄い、光を弾くギリギリの黒さなのに、これは形のおかげで小さな光をちゃんと引き立てることができそう…コンテを的確に咀嚼して下さって…流石先生です！」

「あとは、君のオペレーターと、アイドルとしての力量次第だ。素敵に着こなして…いや、どうあれ君は着こなすな。そのように作ったつもりだ。ステージを楽しみにしているよ」

「はい、もうステージはほぼ出来ているので、後は当日、全力で」

そう言って微笑む吾華音。ふと、目を閉じて夢小路が呟いた。

「君は覚えていないかもしれないけれど、あの頃、天羽先生と僕の間で君を巡って綱引きがあった。勝負事には無縁な性格だと思っていたからね、自分の負けん気に驚いたものだよ」

「あの頃の私は、主義主張なくマネキンでいる事に徹していた気がします」

「撮影の時はそうだったね。凍れる心を感じさせる横顔は、僕の世界に相応しいと確信していた。でも、ランウェイでは違っただろう？」

「えっ…そうでしたか？なにぶん昔の事なので、恥ずかしながらよく覚えていません」

「ランウェイでの君は誰よりも自由で、纏ったドレスの魂を吸収したかのように世界を広げていた。天羽先生は君はモデルに進むのだと確信していたそうだよ」

自身の記憶にない自分がいた。先生の記憶違い？しかし、吾華音はえてしてこういう事は先達の方がよく覚えている事を経験則で承知している。

「覚えて…いないです。変ですね、こんなに綺麗さっぱり記憶が抜け落ちるなんてあるのかな。そんな楽しそうな記憶、忘れるわけが…」

「その直後に、君が今の道を歩み始めたのと関係があるのかな。少しだけ悔やんでいるけれど、今こうしてユリカやスミレを輝かせてくれている君を見ていると、正しかったのだろうか。これで。これからも頼むよ、吾華音」

「こちらこそ、夢小路先生。折角の思い出が私の中に残っていないのは悔しいですが…」

「気に病むことはない。幼い頃の話だし、事情があつてそうなったのなら、無理に思い出すのは毒だ。それに、僕らは覚えているからね。君がその気になったなら、昔話でよければいくらでもしよう。僕にはいい思い出だし、おそらく天羽先生にとってもそうだろう」

「…ありがとうございます」

自分の中で転機にあたる何かがあった。周囲の大人は知っているのかもしれない。しかし、今は他に集中すべき事がある。

迷いが顔に浮かぶ吾華音に、そっと夢小路が語りかけた。

「そうだ、ステージ後はアイドルとしても活動するという認識だが、オファーは何処に出せばいいかな。いい機会だから、フォーマルをはじめとしたハイターゲットを、プレタポルテに拡大したいと思う。吾華音、またモデルを頼まれてくれるかい？」

少しだけ悩んで返答をする。

「今のところオファー先は私のブランドの事務所です。でも…今の私は先生の世界に相応しいでしょうか？」

「そのドレスが答えになっていないかい？…勿論君をイメージしたもののだが、ステージの翌日からパーティードレスとして広報展開する予定なんだ」

吾華音の胸の鼓動が早まる。まさかお披露目前にオファーがあるとは。しかも長く尊敬してきた先生の直接の申し出。不安が消えていく。

「…ありがとうございます！是非やらせて下さい！」

「こちらこそ有難う。手付けという事で、勿論そのドレスはプレゼントさせてもらうよ。あと、ささやかだがここの払いは僕が持とう。そうだ、おすすめの土産があるなら教えて」

あまり人前で笑わない夢小路が笑顔を見せた。

その後、世間話とともに甘味を楽しんだ2人。吾華音は車で夢小路を自宅へ送り届けると、長らく帰っていない故郷の土産とともに帰宅した。

ステージに必要なものは概ね揃った。

残すは1週間、ひたすら詰めて、本番で開花させるだけ。

とはいえ少々くたびれつつもある。

ダメ元で織姫・ティアラの2人にメールをしてみたら、成功したら3人に1週間のオフと4人に旅行のご褒美を、という返答が。

ステージで燃え尽きても大丈夫と分かるや妙に元気になる4人。
吾華音はデビュー即オフとか大丈夫か？と一瞬思うも、すぐ考えるのをやめた。今更遅れなんて気にならない。もう十分遅れたのだから。

出し切るという決意が鮮明に。そして時計の針はその時へと着実に進んでいった。
